



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	境界を展示する : 「アイヌと境界」展における試み
Author(s)	山崎, 幸治
Citation	境界研究, 1, 141-149
Issue Date	2014-03-01
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.s.141
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61335
Type	departmental bulletin paper
File Information	11Yamasaki.pdf



境界を展示する

——「アイヌと境界」展における試み——

山崎 幸治

はじめに

北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」(以下、「本GCOEプログラム」と略記する)は、その研究成果等を広く社会に還元するために、北海道大学総合博物館二階GCOEブースにおいて企画展示を継続的に実施した。筆者は、その第4期となる「先住民と国境」と題する企画展示を担当した。周知のとおり、先住民とよばれる人々は、世界の様々な地域に居住しており、それぞれの先住民をとりまく状況は多様であるが、「先住民と国境」展では、北米大陸の先住民であるヤキと日本のアイヌを取りあげ、本GCOEプログラムが着目する「境界」を企画立案のキーワードとした。展示は、2010年11月19日から2011年5月8日までの約五カ月半にわたり、会期を前半と後半に分けて実施した。会期の前半では、「北米先住民ヤキの世界」というサブタイトルのもと、北米先住民ヤキをとりまく地理的な国境に関するトピックを取りあげた⁽¹⁾。会期の後半では、「アイヌと境界」というサブタイトルのもと、アイヌの事例から、概念的な「境界」に関するトピックを取りあげた⁽²⁾。いずれも本GCOEプログラムが主催、北海道大学アイヌ・先住民研究センターが共催となり実施した。

本稿では、上記の展示のうち、筆者が責任者として携わった会期後半(2011年2月18日～5月8日)の「アイヌと境界」展(以下、「本展示」と略記する)について展示方法に着目して記述する。

(1) 「北米先住民ヤキの世界」展は、ヤキの専門家である水谷裕佳氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター博士研究員：当時)を中心として実施され、筆者はその補助的な役割を担った。展示の会期は、2010年11月19日から2011年2月13日であった。また、早稲田大学ワセダギャラリーにおいても、2012年2月2日から16日まで巡回展を実施した。

(2) 本展示で製作したコンテンツの一部は、北海道大学総合博物館での展示終了後、国立民族学博物館での「千島・樺太・北海道 アイヌの暮らし——ドイツコレクションを中心に」(2011年10月6日～12月6日、主催：国立民族学博物館、共催：財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構)、および、慶應義塾大学日吉キャンパス来住舎での「在るということ——あるアイヌたちの日常と本来性」(2012年12月3日～12月8日、主催：慶應義塾大学HAPP)、および、イースト・ウエスト・センター(ハワイ州、ホノルル)でのAINU TREASURES: A Living Tradition in Northern Japan(2013年1月20日～5月5日、主催：East-West Center Arts Program、共催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター)においても展示された。ご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げます。

博物館展示では、その展示が伝えようとするメッセージを、観覧者へ可能な限り正確かつ効果的に伝えることが求められる。そこでは展示方法に関して様々な工夫がなされるが、その実践が記録されることは多くない。本展示では概念としての「境界」という曖昧なトピックを主題としたこともあり、多くの実験的な展示方法を試みた。これらの実験的な展示方法は、本展示が学術的な挑戦に寛容な大学博物館を会場としたからこそ可能だったともいえ、今後さらなる深化が求められる。よって、本稿では、本展示における試みを活字として記録し、検証可能なものとするを目的とする。

1. 展示のねらい

本展示のねらいは、ふたつあった。ひとつは、アイヌをとりまく状況を事例として、普段意識化することが難しい概念的な「境界」を観覧者に意識させ、「境界」とは何かについて、みずから考えてもらうことであった。もうひとつは、現代のアイヌ文化に関する展示のあり方を模索することであった⁽³⁾。

しかし、本展示のねらいから派生する疑問に対する答えは、十分に用意されていないのが現状である。本GCOEプログラムにおいても、その答えを求める議論が継続中である。とはいえ、明快な答えが見出されるまで博物館での展示を控えるべきと断言することもできないであろう。なぜなら研究の最前線で議論されているテーマの多くは、社会から切り離されたものではなく、現在に生きる人々に密接に関わっているからである。その探求は研究者だけに独占されるべきものではない。このような理念のもと、本展示では、概念的な「境界」というトピックについて、観覧者みずからに考えてもらうための素材や契機を提供すること自体を目指した。

また、博物館展示が、学術論文よりも社会一般の人々の目に触れる機会が多く、アクセスが容易な点も無視できないだろう。現代社会における重要な課題を、現在進行形に近いかたちで共有し、社会とともに考えていくことは、今後ますます重要になってくると考えられる。これは学術論文においても原則的には同じであるが、その伝達効果を考えるならば博物館展示という方法は有効であると考えられる。もちろん、これは研究者による緻密な検証と分析の重要性を失わせるものではない。むしろ、これと両立するかたちで同時代性と迅速性を持った社会への関与と還元の可能性を博物館展示が開いてくれるのではないだろうか。本展示が概念としての「境界」という難解なトピックを選択した背景には、このような可能性を模索するねらいもあった。

(3) 本展示の企画立案にあたっては、2007-2010年度に実施された国立民族学博物館共同研究「博物館におけるアイヌ民族とその文化の展示のあり方の再検討」(代表者 スチュアート ヘンリ)における現代のアイヌ文化展示のあり方を巡る議論から多くの示唆を得た。よって、本展示は、これらの議論を受けての2011年時点における一試案とも位置づけられる。

2. 展示の構成

まず全体の展示構成について述べておきたい。本展示の会場となった北海道大学総合博物館二階GCOEブースは、床面積としては決して広くはなかったが、逆に、それにより展示の意図が明確化し、統一感のある展示空間を構成することができた(写真1)。

本展示のメインとなる動画作品が映し出される大型モニタは、会場の中央奥に設置された。その両側には、後述する映像作品に登場する被写体(儀礼参加者)とカメラマンがペアとなって写る等身大のタペストリー四枚が取り付けられた。各タペストリー横の壁面には、タペストリーに写る二人による映像作品の撮影当日の感想がパネルとして、それぞれ取り付けられた(写真2)。

等身大のタペストリーは、前後に角度をつけて取り付けられた。これにより会場入口に立った観覧者は、八名(四ペア)の人々に出迎えられるような感覚を覚える。タペストリーに写る八名のうち六名はアイヌであり、そのうち四名はアイヌ文様の施された衣服もしくは晴着を着用している。このような人物写真を全面に押し出した展示方法は、民具といった物質文化資料が中心を占め、なかなか人の姿や顔が見えにくい従来のアイヌ文化展示に対する挑戦でもあった。

会場の中央スペースには、四個の石製の腰掛けが円形に配置された。観覧者はこれに座り、中央奥の大型モニタに映し出される映像作品を観ることになる。四個の腰掛けに囲まれた床面中央には、天井からスポットライトが照射され、その中心に『境界』って何？いつ？どこで？だれが？何を？どのように？なぜ？』という本展示での観覧者への問いかけを端的に記したシートが貼られた(写真3)。このシートには、観覧者同士が車座に



写真1 入口からみた展示会場



写真2 タペストリーとパネル

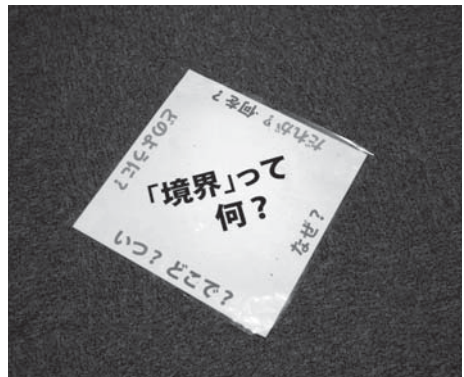


写真3 床面に貼られたシート

なり、そこで「境界」について会話を交わすことを促すねらいがあった。

また、本展示のメインとなる大型モニタを中心に構成された展示空間を乱さないように、二点の資料が配置された。展示された資料の詳細については次項で述べるが、大型モニタの対面に位置する空間、すなわち会場入口の脇に立つ柱の側に、撮影当日に被写体(儀礼参加者)の一人が着用した衣服が入る展示ケースが置かれた(写真4)。また、展示会場の外となるGCOEブースに面した通路の壁面に、三人のモデルの「伝統的な晴着姿」と「普段の洋服姿」が、見る角度によって見え隠れするレンチキュラーパネルが下げられた(写真5、6)。



写真4 撮影当日に着用された衣服



写真5 レンチキュラーパネル(晴着)



写真6 レンチキュラーパネル(普段着)

3. 展示資料

ここでは展示された主な資料について、展示方法に着目して述べておきたい。

a) 映像作品『アイヌと境界— pet kamuynomi ペッ カムイノミ 川の神への祈り—』

本映像作品が、本展示のメインとなるものであった。本映像作品は、2010年9月10日に財団法人アイヌ民族博物館で実施されたペッカムイノミ(川の神への祈り)と呼ばれるアイヌの伝統儀礼に参加した四人の一日の様子を、四台のビデオカメラで同時進行的に追う内容となっている(写真7)⁽⁴⁾。

(4) 2013年4月より、アイヌ民族博物館は、一般財団法人へと移行しているが、本稿では展示クレジットや図録等での記載との統一をはかるため、2011年時点での法人名および職名等を使用する。なお、アイヌ文化振興・研究推進機構も2013年4月より、公益財団法人へと移行しているが、同様に2011年時点の法人名を使用する。



写真7 映像作品『アイヌと境界— pet kamuynomi ペッ カムイノミ 川の神への祈り—』のシーン

本映像作品のコンセプト作成および撮影総括は、筆者と北原次郎太氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授)が担当した。ここではその概要を素描するに止めるが、本映像作品では、四人の被写体(儀礼参加者)の、それぞれの日常から財団法人アイヌ民族博物館で実施される儀礼に参集するまでの様子、四人が一同に会する儀礼の様子、儀礼終了後に再びそれぞれの日常へと戻っていく様子が、同時進行的に映しだされる。

本映像作品は、「日々の暮らし／伝統文化」「現在／過去」「日常／非日常」「職場／家庭」「カメラマン／被写体」「アイヌ／和人」「録画ボタンのオン／オフ」「正装／普段着」など多種多様な「境界」を意識させるように編集されており、それらの「境界」が重なり、交差し、もつれ合い、解け合うような感覚を観覧者に抱かせる。

本映像作品は約11分という短編作品であり、そのなかで上記のような「境界」について観覧者に効果的な問いかけをおこなうために、儀礼が実施される日を撮影日に選んだ。撮影の際には、映像内において複数の視線が交差するシーンを意識的に撮影した。よって映像作品内には、あるカメラが追う被写体(儀礼参加者)の背後に、別のペアが映るシーンを認めることができる。編集時にも、前述したような複数の「境界」が時間的および内容的にバランス良く盛り込まれるように配慮した。エンドロールでは、クレジット横にNGシーンを中心とした映像を付した。これは目新しい方法ではないが、本映像作品自体が「創られたもの」であることを観覧者へ印象付け、カメラの録画ボタンのオンとオフによって生み出される、カメラが回っていない現実との「境界」を意識させる工夫であった。

b) 被写体とカメラマンの声

本映像作品は、被写体(儀礼参加者)とカメラマンがペアとなり、一日をともにして撮影されたが、その様子を観覧者にリアルに感じてもらうために、それら四ペア(八人)の等身大のタペストリーと撮影当日の感想をパネルとして展示した(写真2)。パネルは、本を見

開いた状態を模してデザインされ、被写体(儀礼参加者)とカメラマンの当日の感想が、左右のページに分かれるかたちで記された。観覧者は、パネルのデザインとしての見開きページのノド部分に生じている線から「境界」を連想し、両者の声を比較することになる。本映像作品において被写体となった儀礼参加者四名はアイヌであったが、カメラマンは筆者を含む和人二名、もう二名はアイヌの女性であった。よって、パネルに記された撮影当日の感想には、複数の発話のポジションを認めることができる⁽⁵⁾。これは、アイヌ文化を記録・研究する主体に関わる「境界」を意識させるための工夫であった。

c) 撮影当日に着用された衣服

実物資料として、映像作品の被写体(儀礼参加者)の一人である川上将史氏が所有するアイヌの伝統的な晴着を展示した。その際、川上氏が撮影当日に着用していたTシャツと綿パンツも合わせて展示した(写真4)。これは、儀礼時における川上氏の服装を再現したものである。このような普段着の上に伝統的な晴着を着るスタイルは、今日おこなわれている儀礼の場で日常的に見られるものであり、現代のアイヌ文化の一側面を表象しているといえる。晴着と普段着との重なりには、「正装／普段着」「日々の暮らし／伝統文化」など複数の「境界」を見出すことが可能である。また、衣服にそえられたキャプションには、詳細な情報を盛り込んだ(写真8)。これにより観覧者は、展示されている晴着が現在も使用されているものであり、また、普段着の製作地から世界経済との関係を気づかされることになる。

なお、これは展示準備のなかで判明したことであるが、川上氏が撮影当日に晴着の下に着ていたTシャツは、2010年に川上氏が北米先住民との交流のためにカナダ、バンクーバー市を訪問した際に購入されたものであった。そのTシャツは、先住民アート関連の商品を販売するNative Northwest社のものであった⁽⁶⁾。ここからは「先住民」というある意味で

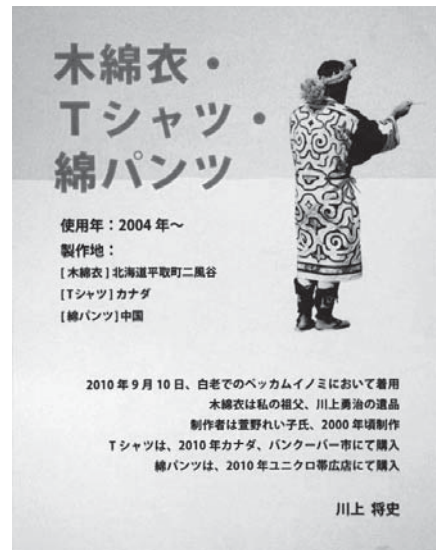


写真8 撮影当日に着用された衣服のキャプション

(5) パネルに記された全員の撮影当日の感想は、パネルのデザインを保持したまま本展示図録(リーフレット)に再録されている。山崎幸治、木山克彦、宇佐見祥子編『アイヌと境界：グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」第4期展示』北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」、2011年を参照。

(6) Native Northwest社は、1982年創業されたバンクーバーに拠点を持つ会社である。取り扱う主な商品は、カナダ北西海岸地域の先住民のデザインが施された服飾品や雑貨品であり、先住民のアーティストとのコラボレーションを積極的におこなっている。川上氏が撮影当日に着用していたTシャツは、このNative Northwest社のブランドラインのひとつNative Originsであった。同社HPを参照[<http://nativenorthwest.com/>](2011年11月10日閲覧)。

「境界」を生み出す概念がグローバルに拡がり、その「境界」によって地理的に離れた人々が接続されるという先住民に関わる現代的な状況を読み取ることができる。

d) 撮影に使用されたビデオカメラ

実物資料として、撮影に使用したビデオカメラと三脚も展示した。ここでは、つぎのような展示方法に関する試みをおこなった。

まず、展示されるビデオカメラに電源を入れ、そのレンズが前述の「c) 撮影当日に着用された衣服」をみている観覧者の後ろ姿をとらえる位置に設置した。つぎに、レンズがとらえた映像が、ビデオカメラに接続された外部出力ケーブルを経由して「c) 撮影当日に着用された衣服」の横に置かれている小型モニタに映し出されるようにした(図1)。小型モニタには、下記の文章をキャプションとしてそえた。

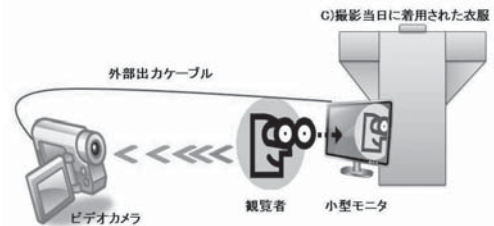


図1 ビデオカメラと小型モニタとの関係

「アイヌと境界」展を観覧する人(びと)

場所：北海道大学総合博物館 GCOE 展示ブース

日時：今、※撮影はされていません。ご安心下さい。

これによって、観覧者は何気なく見た小型モニタのなかに、みずからの後ろ姿を発見し、自分自身が展示の一部となっていることに気づくことになる(写真9)。これは、博物館展示における「展示する側」と「展示される側」との間に存在する「境界」を意識させる試みであった。

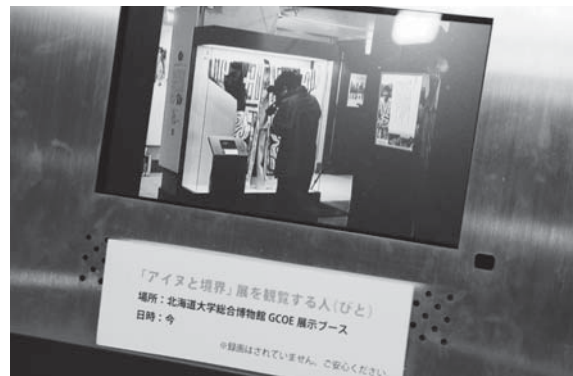


写真9 小型モニタに映る観覧者(撮影する筆者)

e) レンチキュラーパネル(晴着と普段着)

展示会場の外となる通路の壁面には、レンチキュラーと呼ばれる特殊技術で印刷された写真パネルを展示した。写真パネルには三人のモデルが写っており、彼らの「晴着」と「普段着」の姿が見る角度によって交互に入れ替わって見えるようになっている(写真5、6)。見る角度で画像が入れ替わるレンチキュラーパネルは、通路を歩いている人々の目を引きつけ、本展示会場に人々を誘導する効果もあった。

本パネルには、モデルの一人である北原次郎太氏により、下記の文章がキャプションとしてええられた。

パネルの前に立って少し角度を変えと「伝統的な衣装」と「ふつうの服」を身につけた姿が見えるようになっています。どちらか一方が本当の姿ではありません。現代の暮らしと伝統文化は、見え隠れする二つの像のように重なり合っています。これは「日本人」と「日本の伝統文化」の関係にも似ていないでしょうか。

キャプションの文章からも読み取れるように、本レンチキュラーパネルは、伝統と現代の間の「境界」と、そこでの在りようを意識させるねらいがあった。

4. 展示の評価(アンケートより)

展示会場では、任意の記入式アンケートを実施した(回収数56)。アンケート結果の分析は、紙幅の関係上ここでは不可能であるが、展示の満足度については、「満足(45%)」、「どちらかという満足(36%)」、「どちらかという不満(11%)」、「不満(5%)」、「無回答(3%)」であった。「満足」と「どちらかという満足」を合わせると八割を超えており、実験的な展示としては、おおむね高い満足度が得られたと考えている。

高い満足度が得られた要因としては、現代のアイヌ文化に関する展示が少ない現状において、本展示が観覧者にとって目新しく映ったことが推測される。それは「今までアイヌというと、どうも日常生活から切り離された感じがプンプンして、違う世界の話のようにしか思えませんでした、ビデオでは日常の生活からアイヌの儀式への流れが映し出されていて、とても新鮮な気分になりました」というアンケートでの感想からも読み取れる。「境界については、ちょうど私も考えていたところで、ヒントがもらえるかなと思って、この展示を見にきました。ダイレクトな答えは得ることができなかったけど、私と同じことを考え、答えを探し、またその答えに近づく過程を楽しんでいる様子を感じることができて励まされました」という感想は、本展示のねらいが観覧者に正確に伝わったことを示している。

ただし、「展示物が少なく、説明も少なく、今ひとつ意図が見えてこなかった。アイヌ関係について、もっと教えてください」という感想もあった。任意の記入式アンケートにおいて「どちらかという不満(11%)」「不満(5%)」という数字は軽視できない数字であり、本展示のねらいを観覧者に十分に伝えるためには、さらなる工夫が必要であるといえる。

おわりに

本展示では、概念的な「境界」を博物館において展示することを試みた。同時に、現代のアイヌ文化に関する展示のあり方を模索した。本展示で試みた実験的な展示方法の多く

が、アイディア先行の未成熟な段階にあることは筆者が最も認識しているところである。現代のアイヌ文化に関する展示のあり方に明確な指針を提示できたとはいえない。また、本展示が観覧者に複数の「境界」を意識させ、それを揺さぶることに成功したとしても、それらの「境界」がなぜ生まれたのか、どのように生まれたのか、といった問いには答えていない。その問いかけに止まっていることが本展示の限界であり、今後の課題として明記しておく必要がある。

とはいえ、博物館展示という形あるものを作り上げていくなかで実践自体には大きな意義があったと考えている。実際、展示準備を進めるなかで、筆者らが企画段階では予想していなかった多種多様な「境界」が立ち現れ、その動態を意識化することができた。前述した、撮影当日に晴着の下に着用されていたTシャツがもたらした気づきは、その好例である。これは展示を実践したからこそ得られた成果といえる。

博物館展示には常に実践がともなう。そこでは展示の目的に照らし、どのような展示方法を採用するのかという現実的な決断を何度も迫られる。本展示で試みた実験的な展示方法が、今後の「境界」といった難解かつ曖昧なテーマを扱う博物館展示や現代のアイヌ文化に関する展示のあり方、そこでの具体的な模索に少しでも参照され検討されるならば、本稿の目的は達せられたと考える。

*北海道大学総合博物館における本展示の開催にあたっては、特別協力をいただいた財団法人アイヌ民族博物館はじめ、多くの方々にご協力いただきました。記して、感謝申し上げます。野本勝信、野本三治、山内久美子、川上将史、川村このみ、木村君由美、村木美幸、八谷麻衣、檜木貴美子、田村将人、スチュアート ヘンリ、松枝大治、佐々木利和、北原次郎太、若園雄志郎、岸本宜久、木山克彦、宇佐見祥子、水谷裕佳、岩下明裕、(株)エフ・オブジェクト、(株)ウェザーコック(順不同・敬称略)。

